以環境文學的角度閱讀村上春樹的可能性：對比石牟礼道子的共同點

葉麥

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

四十多年來，研究者從不同角度研究村上春樹的文學，包括精神分析、文化符號學和認知語言學。目前為止，不乏用"震災後文學"來討論村上春樹的作品。本論文中，筆者首先確認"日本環境文學先驅 "石牟礼道子的《苦海淨土》，然後針對《神的孩子都在跳舞》和《刺殺騎士團長》中的地震進行研究，從環境文學的角度探索村上文學的新可能性。

通過環境文學的視角，石牟礼道子的"水俣病"和村上春樹的"地震"都可以被認為是"持續的、與未來相關的"事件。 與《苦海淨土》一樣，《神的孩子都在跳舞》和《刺殺騎士團長》都可以被解讀為超越對社會制度的批評，帶來"有希望的未來"的環境文學。

關鍵詞：水俣病、阪神淡路大地震、日本東北大地震、環境文學、風景

受理日期:2021 年 08 月 31 日

通過日期:2021 年 10 月 29 日

DOI:10.29758/TWRYJYSB.202112_(37).0007

The Possibility of Haruki Murakami's Literature as Environmental Literature:Through the Commonality with Michiko Ishimure

Yeh, Ling

Assistant Professor, Tamkang University

Abstract

For more than forty years, researchers have studied Haruki Murakami's literature from different perspectives, including psychoanalysis, cultural symbolism, and cognitive linguistics. At present, there is no lack of discussion of Haruki Murakami's works in terms of "post-earthquake literature. In this essay, the author first identifies "Japanese environmental literature pioneer" Michiko Ishimure's The Pure Land of the Bitter Sea, and then examines the earthquake in *After the Quake* and *Killing Commendatore* to explore new possibilities for Murakami's literature from the perspective of environmental literature.

Through the perspective of environmental literature, both "Minamata disease" of Michiko Ishimure and "earthquake" of Haruki Murakami can be considered as "continuous and future-related" events. Like *Paradise in the Sea of Sorrow*, *After the Quake* and *Killing Commendatore* can be interpreted as environmental literature that goes beyond criticism of the social system to bring about a "promising future".

Keywords: Minamata disease, The Great Hanshin earthquake, Great East Japan earthquake, Environmental literature, Landscape

環境文学として村上春樹文学の可能性
―石牟礼道子との共通性を通して―

葉麦
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

40年以上に亘って、村上春樹文学は精神分析学、文化記号論、認知言語学などの異なった視点で研究されてきた。その中、村上春樹の作品を「震災後文学」として論じる先行研究は決して少なくはない。本稿では、「日本の環境文学の先駆的作家」と言われる石牟礼道子の『苦海浄土――わが水俣病』を確認した上で、地震に触れた『神の子どもたちはみな踊る』と『騎士団長殺し』を対象にして、環境文学の視点で村上春樹文学の新たな可能性を探った。

環境文学の視点を通して、石牟礼道子の「水俣病」も村上春樹の「地震」も過去の歴史事件から離れて、現在進行中の、未来へと繋ぐ出来事だと考えられる。『苦海浄土』との共通性として見ると、『神の子どもたちはみな踊る』も『騎士団長殺し』も社会システムへの批判を超えて「希望のある未来」をもたらす、環境文学として読める作品だと言えよう。時代的な背景を超えて、石牟礼道子文学の「水俣病」、村上春樹文学の「地震」は人間性を導き出す「風景」だと言えよう。

キーワード：水俣病、阪神淡路大震災、東日本大震災、環境文学、風景

環境文学として村上春樹文学の可能性
―石牟礼道子との共通性を通して―

葉麦
淡江大学日本語文学科助理教授

1. はじめに

2011 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」は、「三位一体の受難」[1]と言われるように、地震及びそれに伴う津波などの自然災害以外、福島第一原子力発電所の事故を含む複合型災害である。このような人類史上未曾有の衝撃を受けた日本社会においては、原子力の使用をめぐる諸問題は浮かび上がってきた。

「今読むべき本はなにかなどの特集が雑誌に組まれて、小説家などの書き手たちがそれに応えていた」[2]という風に、日本文壇においても環境問題に関わる意識が高まっている。そんな中で、東日本大震災をモチーフにした、古川日出男の『馬たちよ、それでも光は無垢で』（新潮社）と川上弘美の『神様　2011』（講談社）が刊行された。一方、東日本大震災以前の、地震に関わる諸作品 [3]も再び注目されてきた。こうして、「震災後文学」という言葉は大いに使われるようになった。

また、文学研究において「エコクリティシズム」（環境批評）は再度注目の的となった。エコクリティシズムの信念は以下のように紹介されている。

---

[1] マニュエル・ヤン（2012）「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての 3・11』河出書房新社 P.93

[2] 木村朗子（2013）『震災後文学論』青土社 P.17

[3] 木村朗子（2013）『震災後文学論』青土社 P.18 では、鴨長明の『方丈記』、泉鏡花の「露宿」「十六夜」「間引菜」（1923 年）、寺田寅彦の「津波と人間」（1933 年）、宇野浩二の『思い川』（1951 年）、村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』（2000 年）などが取り上げられている。

想像力の産物である文学などの諸芸術およびその研究は、環境への配慮を深め、刺激し、方向づけるような言葉、物語、イメージの力をつかみ取るので、環境問題、つまり現在、地球に悪影響をもたらしている様々な形態の環境破壊を理解するうえで大きく貢献できる、という信念である。[4]

引用文が示すように、文学及び文学研究を通して人間社会と自然環境との間にあるべき姿は考えさせられる。結城正美[5]の分類によると、日本文学におけるエコクリティシズムの歴史は以下のようにまとめられる。

表 1　日本文学におけるエコクリティシズムの歴史

時期区分	年代	概要
第一期	1990 年代前半～2000 年	翻訳をとおして環境文学、ネイチャーライティング、エコクリティシズムが紹介された。
第二期	2000 年～2010 年頃	欧米のエコクリティシズム理論を援用して比較研究的アプローチから日本文学の分析が活発した。
第三期	2000 年代後半～2014 年	環境文学研究者と日本文学研究者の研究交流をとおして〈日本のエコクリティシズム〉の探求が本格的に着手された。

表 1 から分かるように、1990 年代に日本に紹介されたエコクリティシズムが日本文学の分析に用いられたのは 2000 年以降である。そして、2000 年代後半から日本文学がエコクリティシズムの視点で読まれるようになった。

[4] ローレンス・ビュエル、ウルズラ・K・ハイザ、カレン・ソーンバー（2014）「文学と環境」小谷一明等編『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版 P.195

[5] 結城正美（2014）「はじめに――日本のエコクリティシズム」小谷一明等編『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版 P.i-ii

以上のような時代背景のもとに、2010 年代において「環境文学」の視点で日本文学を研究するのは広く行われている [6]。「文学・環境学会」（ASLE-Japan）によると、環境文学の範疇は次のように説明されている。

> 「環境文学」（environmental literature または environmental writing）と表現する場合には、人間中心主義的な世界観を批判し、自然環境と人間の対話や交流、共生を主なテーマとするノンフィクション、詩、小説、エッセイ、演劇など、自然が大きく取り上げられるすべての文学を含む。[7]

引用文によると、環境文学は人間中心主義的な世界観への批判、及び自然環境と人間との共生をテーマにしたすべての文学作品と定義されている。また、加藤貞通は「環境文学の主題は人間と自然の関係である。人間と自然の関係を扱う表現はたいてい環境文学である」[8]と論じて、環境文学を人間と自然との環境を扱う作品と広く定義している。さらに、「自然科学者の書いた著作であっても立派な環境文学と見なされる」[9]と説明している。本稿において、以上の二つの定義を参照し「環境文学」を「人間と自然との調和を描写する作品」と定義することにする。

デビュー作『風の歌を聴け』（1979 年・講談社）にある「文章を書くことは自己療養の手段ではなく、自己療養へのささやかな試み

---

[6] 例えば、2013 年に日本文学協会が編集・刊行した『日本文学』第 62 巻第 5 号は、特集のテーマが「環境としての自然・風土」とされている。2015 年に国際芥川龍之介学会が開催した国際シンポジウムのテーマは「都市・震災・文学」である。2018 年に立教大学日本学研究所が主催した国際会議のテーマは「日本と東アジアの〈環境文学〉」である。

[7] ASLE-Japan／文学・環境学会「環境文学用語集」（2021 年 7 月 23 日閲覧）
https://asle-japan.jimdo.com/環境文学用語集/ネイチャーライティング-nature-writing/

[8] 加藤貞通（2007）「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』(3)名古屋大学大学院国際言語文化研究科 P.103

[9] 加藤貞通（2007）「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』(3)名古屋大学大学院国際言語文化研究科 P.103

にしかすぎないからだ」[10]という一文から分かるように、人間内面をめぐる諸問題は村上春樹文学の一貫したテーマである。それにもかかわらず、40 年以上に亘って、村上春樹文学は精神分析学、文化記号論、認知言語学などの異なった視点で研究されてきた。

村上春樹の作品を「震災後文学」として論じる先行研究は決して少なくはない[11]。その中、木村朗子は『神の子どもたちはみな踊る』を取り上げて、阪神淡路大震災のような地震が東京で起きる可能性を説明している[12]。また、山根由美恵は『騎士団長殺し』における「三・一一後に家族を守り、子どもを育てる大団円」[13]を論じている。本稿では、地震に触れた『神の子どもたちはみな踊る』と『騎士団長殺し』を対象にして、環境文学の視点で村上春樹文学の新たな可能性を探ろうとする。

一方、日本の環境文学と言えば、石牟礼道子の作品に言及しない訳にはいかない。なぜなら、「日本の環境文学の先駆的作家」[14]と言われるからである。50 年代からの公害問題・水俣病に直面する『苦海浄土――わが水俣病』（1969 年・講談社）の環境文学としての意義について、早川敦子は以下のように述べている。

> 環境破壊の告発にとどまらず、そこから人間と人間でない生物体系との関係性、環境と人間の関係性の、ときに矛盾を孕む

---

[10] 村上春樹（1990）「風の歌を聴け」『村上春樹全作品 1979～1989　①』講談社 P.8

[11] 例えば、千田洋幸（2014）「パラレルワールドを超えて―二〇一〇年代文化の世界構成―」『日本文学』63(4) 日本文学協会、中野和典（2014）「震災と信仰―村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』論―」『近代文学論集』(40) 日本近代文学会九州支部「近代文学論集」編集委員会、曾秋桂（2014）生に寄り添う村上春樹の「モラル(倫理)」の体現―日本の二つの大震災によるトラウマを超える模索―」『比較文化研究』(114) 日本比較文化学会などが挙げられる。

[12] 木村朗子（2013）『震災後文学論』青土社 P.19

[13] 山根由美恵（2018）「村上春樹『騎士団長殺し』論―〈メタ・テクスト〉性と『震災後文学』―」『近代文学試論』(56) 広島大学近代文学研究会 P.70

[14] 上岡克己（2015）「教室の中のレイチェル・カーソン―環境文学教育の可能性を求めて―」『国際社会文化研究』No.16 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科 P.24

複雑なありようへの問題提起が、文学を通してなされる重要性に環境文学の使命を見るのである。[15]

引用文から分かるように、『苦海浄土』は公害問題による社会批判だけではなく、人間と自然とのあるべき関係をも取り扱う作品である。これは恰も本稿で定義された「環境文学」に一致している。こうして、石牟礼道子が示した環境文学の特徴を究明して、比較を通して、村上春樹文学における環境文学の要素を明らかにしようとする。

以上のように、本稿では環境文学という視点を取り入れて、「環境文学の先駆」である石牟礼道子との共通性を通して、村上春樹文学を環境文学として再読の可能性を試みようとする。

2. 石牟礼道子の環境文学のあり方

2018 年に 90 歳で亡くなった石牟礼道子は、1965 年（当時 38 歳）から「熊本風土記」に『苦海浄土』の初稿を連載し始めた [16]。1969 年に講談社によって『苦海浄土――わが水俣病』が刊行された。そして、「第 2 部　神々の村」（書き下ろし）と『天の魚』（1974 年・筑摩書房）に加わって、三部作として『苦海浄土』は『石牟礼道子全集・不知火』[17]（2004 年・藤原書店）に収録されている。39 年の歳月を費やして、77 歳となった石牟礼道子はようやく『苦海浄土』を一作品としてまとまった。

『苦海浄土』の執筆期間が長くて焦点を絞りにくい恐れがある。また、「第一部は作家石牟礼道子の原点」[18]と論じられているよう

---

[15] 早川敦子（2019）「越境する『命』の神話――石牟礼道子と翻訳の不／可能性」『津田塾大学紀要』(51)津田塾大学全学研修・紀要委員会 P.27

[16] 河出書房新社編集部（2018）「略年譜」『文藝別冊　石牟礼道子　さよなら、不知火海の言魂』河出書房新社 P.221-223

[17] 『石牟礼道子全集・不知火』に収録された際に、『苦海浄土――わが水俣病』は「第 1 部　苦海浄土」と、『天の魚』は「第 3 部　天の魚」とタイトルが変わった。

[18] 若松英輔（2016）「『苦海浄土』とは何か」『NHK100 分 de 名著　2016 年 9 月』NHK 出版 P.6

に、本稿では『苦海浄土――わが水俣病』を考察対象として取り上げることにした。

2.1　水俣病へのアプローチ

『苦海浄土――わが水俣病』は、「作者の描写、登場人物の語り、医師の記録、公文書」[19]を通して、水俣病を記録する作品である。作中に患者に対する記録は散見されている。各章に記録された患者の基本情報を表 2 のようにまとめた。

表 2　各章における水俣病患者の基本情報

章	患者名	出生	語る時点の年齢	発病	死亡	患者番号
第一章	山中九平	昭和 24 年 7 月	16 歳	昭和 30 年 5 月	N/A	16
	柳迫直喜	N/A	N/A	昭和 29 年 6 月 14 日	昭和 29 年 8 月 6 日	N/A
	武田ハギノ	N/A	N/A	昭和 30 年 8 月	昭和 30 年 11 月 22 日	N/A
	山中さつき	昭和 2 年	N/A	昭和 31 年 7 月 13 日	昭和 31 年 9 月 2 日	44
	並崎仙助	明治 20 年 9 月	N/A	昭和 35 年 10 月（74 歳）	昭和 40 年 1 月 15 日（79 歳）	86
	荒木辰夫	明治 31 年	N/A	昭和 30 年 4 月	昭和 40 年 2 月	N/A
第三章	坂上ゆき	大正 3 年 12 月 1 日	N/A	昭和 30 年 5 月	N/A	37
	釜鶴松	明治 36 年	N/A	N/A	昭和 35 年 10 月 13 日	82

[19] 五所純子（2018）「石牟礼道子　主要作品読書ガイド」『文藝別冊　石牟礼道子　さよなら、不知火海の言魂』河出書房新社 P.178

	N/A	N/A	N/A	N/A	昭和 37 年 4 月 19 日	84
	舟場藤吉	N/A	N/A	N/A	昭和 34 年 12 月	N/A
	米盛久雄	昭和 27 年 10 月 7 日	N/A	昭和 30 年 7 月 19 日	昭和 34 年 7 月 24 日	18
第四章	江津野杢太郎	昭和 30 年 11 月	9 歳	胎児性水俣病	N/A	N/A
第五章	杉原ゆり	N/A	17 歳	昭和 31 年 6 月 8 日（6 歳）	N/A	41

＊作中に記録されていないことを N/A で示す。

表 2 から分かるように、出生、発病、死亡の年、及び患者番号といったカルテのような基本的な患者情報は記録されている。また、「昭和三十一年八月二十九日　第一回厚生省への報告」(P.34-38)、「熊本医学会雑誌(第三十一巻補冊第一、昭和三十二年一月)」(P.48-52,161-164)、現代技術史研究会の「技術史研究(第二十八号)」(P.91-92)、熊本大学水俣病医学研究班がまとめた「水俣病――有機水銀中毒に関する研究――」（P.274-279）といった実在した病理的な記録や研究は作中に引用されている。このように、『苦海浄土――わが水俣病』は記録文学の性質を有する一方、N/A が示した記録の漏れが存在するように、『苦海浄土――わが水俣病』の核心は水俣病の記録ではなかろう。

次に、患者に対する描写を手がかりにして、『苦海浄土――わが水俣病』に描かれた「水俣病」を見てみよう。作品における最初の患者である山中九平の登場場面は次のようなものである。

彼はさっきから、おそろしく一心に、一連の「作業」をくり返していた。どうやらそれは「野球」のけいこらしくあったが、彼の動作があまりに厳粛で、声をかけることがためらわれ、わたくしはそこに突っ立ったままで、少年と呼吸をあわせていたのである。（P.15）

のちに「青年期に入りかけている肩つきは、水俣病にさえかからねば、伸びざかりの漁村の少年に育っていたにちがいなかった」（P.15）という説明を入れない限り、語り手の「わたくし」は一人の少年が厳粛に野球の稽古をするのを見つめる場面であろう。

そして、作中に登場していない山中さつきについて、母親の「舟の上でもあれが親方でしたもん。力は強し、腰は強し。あれがカシ網ひくときゃ、舟はゆらっともしよりまっせんじゃった。（後略）」（P.44）という漁るさつきへの回想は、「熊本医学会雑誌（第三十一巻補冊第一、昭和三十二年一月）」に記録された「病例　第一例山中、二十八歳女、職業漁業」（P.51）とは比較的である。母親の記憶にある娘の姿は、決して医学雑誌の「病例」に表されるものではない。

そのほか、「あんまりふとか声でおめけばいちだんと聞こえん」（P.59）という並崎仙助の呟き、「もういっぺん――行こうごたる、海に」（P.168）と坂上ゆきが述べる願望は、患者の肉声として作中に書き記されている。また、「杢は、こやつぁ、ものをいいきらんばってん、ひと一倍、魂の深か子でござす」（P.205）という江津野杢太郎の祖父の言葉、「ゆりはもうぬけがらじゃと、魂はもう残っとらん人間じゃと、新聞記者さんの書いとらすげな。（中略）ゆりが魂の無かはずはなか」（P.269）という杉原ゆりの母親の思いから、患者に注ぐ家族の愛情は強調されている。

「水俣川の下流のほとりに住みついているただの貧しい一主婦」（P.147）である語り手の「わたくし」は、「水俣病事件に悶々たる関心とちいさな使命感を持ち、これを直視し、記録しなければなら

ぬという盲目的な衝動にかられて水俣市立病院水俣病特別病棟を訪れた」（P.145-146）とあるように、地元の住民への愛着を持って、身近な患者を苦しめる水俣病を記録するわけである。

以上のように、「わたくし」が語ろうとするのは、水俣病患者一人ひとりのライフストーリーだと見做されよう。従って、『苦海浄土――わが水俣病』は病気に苦しむ患者、及びその家族の人間性を出発点として、医学雑誌、研究報告の引用を病理的な説明の補助にし水俣病事件の本質に近づく作品だと言えよう。

2.2　「わたくし」が見た水俣病事件

水俣病に苦しむ患者以外、『苦海浄土――わが水俣病』には、環境汚染や公害発生などの一連とした「水俣病事件」の水俣に対する影響も語られている。作中における「水俣病事件」は以下の十箇所である。

① 水俣病事件に対する水俣市の住民の、幾通りもの微妙な反応の現われ方（P.21・下線は筆者によるもの、以下同）
② 水俣病事件への、この事件を創り出し、隠蔽し、無視し、忘れ去らせようとし、忘れつつある側（P.76）
③ 水俣病事件がその表皮を破りかけて拡大潜行しつつあるとは、水俣市民の誰もが気づくはずもなかった（P.102）
④ 水俣病事件で、さんざんの目にあわされたロボット氏（P.103）
⑤ 水俣病事件に悶々たる関心とちいさな使命感（P.145）
⑥ 市民会議が持っている水俣病事件に対する原罪意識（P.321）
⑦ わが水俣市は工場誘致をうたいあげ、水俣病事件は市民のあいだにいよいよタブーとなりつつある（P.323）
⑧ 水俣病事件もイタイイタイ病も、谷中村滅亡後の七十年を深い潜在期間として現われる（P.323）
⑨ 水俣病事件の潜在期間をいれて昭和二十四年に市政発足した水俣市政（P.332）
⑩ 水俣病事件の最後の深淵がゆっくりと口をひらくのはこれから

である（P.342-343）

例①の「微妙な反応」は水俣病事件（以下は「事件」と略称する）に対して水俣市民の異なった態度を表す。例②は事件に責任を負うべき側の存在を指摘する箇所である。例③は水俣病事件が水俣市民の予想を超えた社会事件になったことを示す。例④の「ロボット氏」は水俣市長の事件に対する無能を揶揄する言葉である。例⑤と例⑥は「わたくし」を含めて市民会議を発足したメンバーの事件に対する立場を示すものである。例⑦は事件をタブーとする一般的な水俣市民の立場を表現する。例⑧は日本政府の事件に対する不作為を批判するものである。例⑨は水俣市の事件に対する不作為を指摘する箇所である。例⑩は政府見解が発表しても事件が解決できない政府の不作為を示すものである。

以上を整理すると、「水俣病事件」に対する語りは二種類に分けられる。一つは例①②⑤⑥⑦のように、事件に対して水俣地域の対立を表すものである。そして、例③④⑧⑨⑩が示すように、もう一つは水俣市、日本国の事件に対する不作為である。この二種類の「水俣病事件」について、岩岡中正は以下のように述べている。

> 水俣で問われていたのは、近代システムが対象とし所有権を中心とする近代法が想定する「市民」ではなく、その外にあって呻吟するが故にあえて「死民」「棄民」「流民」と自己規定する人々の生と権利とその救済であった。[20]

岩岡氏の論点によると、日本国が制定した「近代システム」の対象とするのは「市民」であれば、水俣病患者はそれに属しない「死民」「棄民」「流民」とされている。そして、『苦海浄土――わが水俣病』に描かれた水俣病事件は、水俣病患者が求める生、権利、

[20] 岩岡中正（2008）「石牟礼道子における文学と政治」『熊本法学』(113)熊本大学 P.268

救済を含めているのである。その方法として、水俣在住の主婦である「わたくし」は事件の是非を論ぜず、自分が実際に見た身近な出来事を語ることによって「市民」と思われない水俣病患者を代弁するわけである。

2.3　『苦海浄土』における水俣の「風景」

伊藤洋典は「風景」という概念を用いて『苦海浄土』を分析し「石牟礼が描く水俣病患者の世界は、彼らがその一部となっている生類の世界の風景であった。（中略）彼らが求めたのは、個人としての生ではなく、彼らがそこで暮らしている場所ごとの救済なのであった」[21]と述べて、患者の帰属は故郷・水俣ごとの救済だという結論を出している。本稿では伊藤氏の研究結果を踏まえた上で、「風景」の概念を借用し石牟礼道子の環境文学のあり方を論ずる。「風景」について、伊藤氏は下記のように説明している。

> 風景というのは、客観的に存在する自然それ自体ではなく、まずは身体（五感、感性）によって捉えられ、現われた世界である。（中略）自分の身体を起点として把握されたこの意味的関連の総体としての世界の現われこそ、風景にほかならない。[22]

風景は客観的な自然とは異なって、人間の感情に意味を与えられるものである。逆に言えば、自然と人間の感性と共鳴する部分は風景だと考えられる。『苦海浄土――わが水俣病』には水俣の自然に対する描写・記録が多く見られる。まず、水俣病が多発する地域に対する箇所を見てみよう。

作中に引用された「熊本医学会雑誌（第三十一巻補冊第一、昭和三十二年一月）」には「特に患者の多発しているのはその中、明神、

---

[21] 伊藤洋典（2011）「風景への帰属、あるいは帰属の風景」『熊本法学』(122)熊本大学 P.247

[22] 伊藤洋典（2011）「風景への帰属、あるいは帰属の風景」『熊本法学』(122)熊本大学 P.221

月の浦、出月、湯堂の四部落である」（P.48-49）という記録が見られる。作中における明神、月の浦、出月、湯堂の四部落の出現箇所は添付資料の通りである。作品中の出現回数は明神 11 回、月の浦 31 回、出月 14 回、湯堂 21 回の総計 77 回である。その多くは水俣病に関する資料として語られている。

一方、不知火海周辺の「明神」に家を建てる漁民の願望を示す「例文 47-49」[23]、「月の浦」の海に戻って漁をする坂上ゆきの願いを表す「例文 36」、「出月」においての昔の葬式を表明する「例文 72-73」、「湯堂」の夏の景色を述べる「例文 1-3」があるように、四部落は決して研究資料における「水俣病多発地区」ではなく、水俣住民の感情をこめた故郷であろう。

しかし、水俣病事件発生以来、患者にとっての故郷は次のように変貌するようになった。

> そのようなバスの中の様子は、ことに水俣病発生いらい、人びとが、バスの外の、つまり自分たちが生まれ育ち住みつき、暮らしをたててきた故郷の景色の中に、いつもすっぽりと入りきれないで暮らしてきたことを物語っていた。（P.20）

以上は患者を検診場所に送る専用バスにおける場面である。健常者に異様な目を晒された「四肢の異常姿態」（P.20）の患者、及びその家族にとって、患者専用バスの方は「故郷の景色」より安らぎの空間であろう。また、水俣病患者が差別を受ける場面も見られる。

> ここはもう地獄じゃろと――。（中略）買物もでけん、水ももらいにゆけんとですけん。店に行ってもおとろしさに店の人は飛ば自分の手で取んなはらん。仕方なしに板の間の上に置い

[23] 添付資料の資料 1 を参照。

てきよりました。箸ででもはさんで、鍋ででも煮らしたじゃろ、あのときの銭は。（P.47）

地元住民に敬遠された山中さつきの母親の回想において、故郷は「地獄」と呼ばれる。このような差別を起こしたのは、病気に対する恐怖以外、水俣市民の「会社」[24]に対する葛藤によるものだと考えられる。患者である江津野杢太郎の祖父は「会社」についての思いを次のように語る。

会社さえ出けとれば、（中略）会社の太うなるに連れて世の中のひらけて、この時代には学校にゆくごとなって、あるいは孫の時代にゃ、会社ゆきが、わしの子孫から出てこんともかぎらん。（中略）あるいは子孫の代にゃ会社の世話になるかもしれん。（P.223）

患者の家族でさえ、「会社」が貧しい漁村の経済状況に寄与することを期待する。このように、「会社」は水俣の経済基盤となることは容易に想像されよう。水俣市が主催した「水俣病死亡者合同慰霊祭」に「一般市民が、わたくしをのぞいてただひとりも参加しなかった」（P.334）という現状は、水俣市民の事件に対する葛藤を示すのではなかろうか。

以上のように、患者にとっての水俣の「風景」は明らかに二つに分裂している。一つは事件発生以前の漁業の根幹となる「不知火海」である。つまり、伊藤氏が論じる「患者の帰属」である。もう一つは、事件発生以降の「地獄」だと考えられる。同時に、近代システムの対象である水俣の一般的な「市民」にとって、水俣の「風景」

[24] 「ここらあたりの近郷近在は、くまなくチッソ工場のことを『会社』とよぶのである」（P.292）とあるように、水俣病の原因となるメンチル水銀化合物を含む排水を水俣湾に流す新日本窒素水俣工場を「会社」と表記する。

も二つに分けている。一つは患者と共有する「不知火海」であり、もう一つは近代化をもたらした「会社」である。

石牟礼道子の『苦海浄土』は、水俣病事件の告発、国家システムの批判というルポルタージュ的な要素を有するノンフィクションを超えて、石牟礼道子の環境文学は水俣病事件に苦しむ患者の肉声を日本の「市民」に訴えるものだと考えられる。環境問題に苦しむ人間の様子ではなくて、石牟礼道子が語ろうとするのは、苦しめられた自然環境に生き残るために努力する人間の姿だと言えよう。

3. 村上春樹の環境文学

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起きた直後、「文学者たちはただ呆然としていたわけではない。かなり早い時期から、活発かつさまざまな活動があった」[25]と言われる中、世界中で最も知られている日本人作家の一人である村上春樹は、自然に東日本大震災に関する執筆活動を求められている。その期待に反して、ただ「カタルーニャ国際賞」の受賞記念講演で「我々日本人は核に対する『ノー』を叫び続けるべきであった」[26]と発言した村上春樹について、黒古一夫は「このようなスピーチをする作家がノーベル文学賞受賞候補者になっていることに、大いなる違和感も抱かざるを得なかった」[27]と批判している。

確かに、インタービューやエッセイに原子力（核）に言及[28]していても、村上春樹が東日本大震災の要素を作品に用いたのは地震発生後 6 年も経った『騎士団長殺し』（2017 年・新潮社）である。

本稿では、東日本大震災を取り入れた『騎士団長殺し』と阪神淡路大震災をモチーフにした『神の子どもたちはみな踊る』（2000 年・

---

[25] 木村朗子（2013）『震災後文学論』青土社 P.48
[26] 黒古一夫（2013）『文学者の「核・フクシマ論」――吉本隆明・大江健三郎・村上春樹』彩流社 P.154
[27] 黒古一夫（2013）『文学者の「核・フクシマ論」――吉本隆明・大江健三郎・村上春樹』彩流社 P.155
[28] 例えば、『村上さんのところ』（2015 年・新潮社）が挙げられる。

新潮社）を主な考察対象にして、村上春樹文学における環境文学の要素を探ろうとする。

3.1　阪神淡路大震災の「風景」

「地震という題材を直接には取り扱わないことにしよう。物語の場所も神戸から遠く離れたところに設定しよう。その地震がもたらしたものを、できるだけ象徴的なかたちで描くことにしよう」[29]と作者である村上春樹自身が述べたように、『神の子どもたちはみな踊る』は地震そのもの、あるいは地震がもたらした被害を記録するものではない。前節で述べた「風景」の概念で解釈すると、『神の子どもたちはみな踊る』に描かれたのは、客観的な阪神淡路大震災ではなくて、震災に作者である村上春樹の感性が共鳴するものである。

同じく 1995 年に発生した地下鉄サリン事件をめぐって『アンダーグラウンド』(1997 年・講談社)と『約束された場所で―underground 2』（1998 年・文藝春秋）という二つのノンフィクションを上梓した村上春樹は、読者の予測に反して、『新潮』1999 年 8 月号から阪神淡路大震災をモチーフにした「連作『地震の後で』」というタイトルの連載小説を出している。

のちに阪神淡路大震災をノンフィクションに記録しなかった理由を村上春樹は以下のように述べている。

> 僕は神戸の地震についてノンフィクションを書きたいという気持ちには、どうしてもなれなかった。そこは僕が少年時代を送った思い出の深い場所であるし、たくさんの知り合いもいる。[30]

---

[29] 村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990~2000③　短篇集Ⅱ』講談社 P.271

[30] 村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③　短篇集Ⅱ』講談社 P.271

周知の通り、神戸は村上春樹が少年時代を送った故郷である。『神の子どもたちはみな踊る』に描かれた「風景」は、地震に壊された少年時代なのではなかろうか。

『神の子どもたちはみな踊る』は六つの短編を収録する短編小説集である。作中に幼少時代を含む登場人物の過去に関する箇所は次の通りである。

表 3　『神の子どもたちはみな踊る』における幼少時代

作品名	例文
UFO が釧路に降りる	妻は山形の出身で、小村の知る限りでは、神戸近郊には親戚も知り合いも一人もいなかった。（中略）妻の姿は消えていた。（P.107）
アイロンのある風景	「先月の地震は大丈夫だったんですか？ 神戸に家族とかいなかったんですか？」／「さあ、ようわからん。俺な、あっちとはもう関係ないねん。昔のことや」（P.136）
神の子どもたちはみな踊る	善也には父親がいない。生まれたときから、彼には母親しかいなかった。（P.156）
タイランド	あなたが私の人生に対してしたことを思えば、私の生まれるはずだった子どもたちに対してしたことを思えば、それくらいの報いがあって当然ではないか。（P.184）
かえるくん、東京を救う	ご両親が亡くなったあと、あなたはまだ十代だった弟と妹を男手ひとつで育てあげ、大学を出し、結婚の世話までした。（P.206）
蜂蜜パイ	両親と淳平とのあいだの確執はあまりにも深く、長く続いていたので、そこにはもう回復の可能性は見あたらなくなっていた。（P.247）

＊下線は筆者によるもので、傍点は原文のままである。

表 3 から分かるように、地震の後で姿が消えた小村の妻、神戸にいる家族に関係のない三宅、生まれた時から父親のいない善也、子

供たちを産むことができなかったさつき、両親の亡くなった片桐、両親と回復部可能の確執のある純平といった人物が登場する。『神の子どもたちはみな踊る』に収録された六篇のいずれにも家族関係の不在、あるいは消滅が描かれている。

一方、書き下ろしの「蜂蜜パイ」において、淳平の「すぐに結婚を申し込もう。（中略）もう迷いはない」、「二人の女を護らなくてはならない」（P.255）という思いは、新しい家族関係の始まりを象徴している。

阪神淡路大震災が壊した神戸は、村上春樹の故郷にとどまらず、家族との過去の象徴でもある。少年時代を省みた村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』が表現した「風景」は、「過去から未来へ」だと言えよう。

3.2　東日本大震災の「風景」

2015 年 1 月 15 日から 5 月 13 日までという期間限定のウェブサイトで村上春樹は読者の質問を回答するという交流を行なった。「#3326　日本はこれからどうなっちゃうんだろう」という質問に対する答えには、東日本大震災に対する村上春樹の態度が見られる。

> バブル経済の崩壊や、東日本大震災に付随する原発（核発）事故のあとで、日本はそのような大きな失敗から教訓を学んで、もっと洗練され、成熟した国家になっていくのだろうと僕は期待していたのですが、なかなかそうはならないみないです。むしろ逆の方向に進んでいるかも。[31]

引用文から分かるように、村上春樹は日本の原発や原子力利用に否定的な論調を持つというより、東日本大震災を経験した日本政府の対応に失望したと考えられる。

[31] 村上春樹（2015）『村上さんのところ　コンプリート版』新潮社電子版書籍

村上春樹のこのような態度は、2017年『騎士団長殺し』が出版した後のインタビューにも見られる。

> バブルの崩壊があって、それから神戸の地震があって、3・11があって、原発の問題があった。それらの試練を通して、僕は、日本がもっと洗練された国家になって行くんだろうと思っていたわけ。でも今は明らかにそれとは正反対の方向に行ってしまっている。[32]

東日本大震災、原発問題を試練と看做した村上春樹は、2017年になっても予想とは正反対の方向に行ってしまった日本政府に依然として失望を感じたのであろう。

村上春樹の日本政府への態度を念頭に置きながら、『騎士団長殺し』に語られた東日本大震災を見てみよう。「その年の五月から翌年の初めにかけて、私は狭い谷間の入り口近くの山の上に住んでいた」（第1部 P.13）という一文から始まる『騎士団長殺し』の最終章に以下のように東日本大震災が語られている。

> 私が妻のもとに戻り、再び生活を共にするようになってから数年後、三月十一日に東日本一帯に大きな地震が起こった。私はテレビの前に座り、岩手県から宮城県にかけての海外沿いの町が次々に壊滅して行く様子を目にしていた。（第2部 P.529）

語り手である「私」は実際に地震を体験したのではなく、テレビを見て地震を知ったのである。そして、「私」は「テレビの画面を何日もただ眺めていた。テレビの前を離れることができなかった」（第2部 P.529）とあるように、地震に関心を示す。しかし、「私」

[32] 川上未映子訊く／村上春樹語る（2017）『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社 P.62

は決して娘のむろに津波の映像を見せない。その理由について、「私」は次のように語る。

> 彼女には津波や地震というような出来事も理解できなかったし、死というものの持つ意味も理解できなかった。でもとにかく私は彼女の目を手でしっかりと塞いで、津波の映像を見せないようにした。何かを理解することと、何かを見ることとは、またべつのことなのだ。（第 2 部 P.532）

「私」がむろに津波の破壊的な光景を見せないのは、東日本大震災の本質を理解してほしいためだと考えられる。地震、津波がもたらしたのを物理的な破壊と安易に理解するものではない。2011 年に大いに使われた「絆」が示した人間同士の助け合いも東日本大震災の一部ではなかろうか。これは決してテレビ画面を通して感じ取れるものではない。

『騎士団長殺し』の描写を村上春樹の東日本大震災への態度を合わせてみると、東日本大震災の「風景」は日本という国家のシステムの不備を理解してほしいということだと考えられる。東日本大震災を体験していない世代でも日本政府の不作為を理解すれば、二度と同じような人為的な災害の発生がなくなって、日本が「洗練され、成熟した国家」になることが期待されよう。

3.3　石牟礼道子との共通性

前節で述べたように、『苦海浄土――わが水俣病』は、生きていた患者を代弁するものである。患者の人間性に注目し水俣の「風景」を描いた石牟礼道子は時間の制限を超えて歴史を述べている。

> 石牟礼の時間もまた、因果関係を離れて自在に遊離し過去が現在に重層化し、過去の出来事へ主観的に入り込んでいくという「時間の詩化」が行われる。（中略）時間や歴史の一切が主観化されて連続し、歴史上のすべての出来事は、それぞれ意味

と関係性をもって再生する。つまり、過去・現在・未来は一つの時間として和解し循環するのである。[33]

本稿で「環境文学＝人間と自然との調和を描写する作品」と定義したように、過去から存在する自然との調和によって、人間社会に起きた事件は時間の制限から遊離することができて、歴史として風化することはないのではないか。

環境文学の視点を通して、石牟礼道子の「水俣病」も村上春樹の「地震」も過去の歴史事件から離れて、現在進行中の、未来へと繋ぐ出来事だと考えられる。過去の事件と和解しなければ、日本は村上春樹がいう「洗練され、成熟した国家」にならないであろう。こうして、『苦海浄土』との共通性として見ると、『神の子どもたちはみな踊る』も『騎士団長殺し』も社会システムへの批判を超えて「希望のある未来」をもたらす、環境文学として読める作品だと言えよう。確かに石牟礼道子、村上春樹が作品を通して描こうとするものは決して一致していない。しかし、時代的な背景を超えて、石牟礼道子文学の「水俣病」、村上春樹文学の「地震」は人間性を導き出す「風景」だと言えよう。

4. おわりに

1950 年代の近代化が起きた公害問題は地域住民の調和的な関係を破壊した。水俣病事件によって患者への差別、地域の対立は起きてしまった。石牟礼道子は、自分が受け止めた患者の言葉を自身の言葉にした『苦海浄土』を当時の日本「市民」と共有しようとする。環境文学としての『苦海浄土』はルポルタージュ的な批判を超えて、環境問題に対して人間の有するべき姿という問いを表している。

環境文学の視点で読むと、『神の子どもたちはみな踊る』、『騎士団長殺し』で村上春樹が描く地震は、人間社会を壊す暴力的な自

[33] 岩岡中正（2008）「石牟礼道子における存在の回復―対立から和解へ―」『熊本法学』(115)熊本大学 P.10

然災害を超えて、自分の内面に向き合うきっかけとなる。さらに、石牟礼道子との共通性を通して見ると、システムの不備への批判はもちろん、「希望のある未来」を迎えるには過去の事件を未来へと繋げる必要があると思われる。地震という自然に響き合う自分の内面をしっかり受け止めるのは第一歩だと言えよう。

今後の課題として、地震を描く『神の子どもたちはみな踊る』、『騎士団長殺し』以外の作品も取り上げて、環境文学としての村上春樹文学の全貌を明らかにしようと思う。

【付記】

本稿は、日本比較文化学会が主催した「日本比較文化学会第 42 回全国大会・2020 年度国際学術会議」（2020 年 9 月 5 日、北九州国際会議場）における口頭発表（オンライン形式）をもとに、加筆・修正を加えたものである。

テキスト

石牟礼道子（2004）『新装版　苦海浄土　わが水俣病』講談社

村上春樹（2003）「UFO が釧路に降りる」「アイロンのある風景」「神の子どもたちはみな踊る」「タイランド」「かえるくん、東京を救う」「蜂蜜パイ」『村上春樹全作品 1990～2000③　短篇集Ⅱ』講談社

村上春樹（2017）『騎士団長殺し　第 2 部　遷ろうメタファー編』新潮社

参考文献

ASLE-Japan／文学・環境学会「環境文学用語集」（2021 年 7 月 23 日閲覧）https://asle-japan.jimdo.com/環境文学用語集/ネイチャーライティング-nature-writing/

伊藤洋典（2011）「風景への帰属、あるいは帰属の風景」『熊本法学』(122)熊本大学

岩岡中正（2008）「石牟礼道子における存在の回復―対立から和解へ―」『熊本法学』(115)熊本大学
岩岡中正（2008）「石牟礼道子における文学と政治」『熊本法学』(113)熊本大学
小谷一明等編（2014）『文学から環境を考える　エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版
加藤貞通（2007）「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』(3)名古屋大学大学院国際言語文化研究科
上岡克己（2015）「教室の中のレイチェル・カーソン―環境文学教育の可能性を求めて―」『国際社会文化研究』No.16 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科
川上未映子訊く／村上春樹語る（2017）『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社
河出書房新社編集部編（2012）『歴史としての 3・11』河出書房新社
河出書房新社編集部編（2018）『文藝別冊　石牟礼道子　さよなら、不知火海の言魂』河出書房新社
木村朗子（2013）『震災後文学論』青土社
黒古一夫（2013）『文学者の「核・フクシマ論」――吉本隆明・大江健三郎・村上春樹』彩流社
村上春樹（2003）『村上春樹全作品 1990~2000③　短篇集Ⅱ』講談社
村上春樹（2015）『村上さんのところ　コンプリート版』新潮社電子版書籍
早川敦子（2019）「越境する『命』の神話――石牟礼道子と翻訳の不／可能性」『津田塾大学紀要』(51)津田塾大学全学研修・紀要委員会
若松英輔（2016）「『苦海浄土』とは何か」『NHK100 分 de 名著　2016 年 9 月』NHK 出版

添付資料

資料 1　明神、月の浦、出月、湯堂の四部落の出現箇所

通し番号	例文	明神	月の浦	出月	湯堂
1	年に一度か二度、台風でもやって来ぬかぎり、波立つこともない小さな入江を囲んで、湯堂部落がある（P.10）				○
2	湯堂湾は、こそばゆいまぶたのようなさざ波の上に、小さな舟や鰯籠などを浮かべていた（P.10）				○
3	湯堂部落の入江の近くに、薩摩境、肥後藩の陸口番所、水口番所があったはずであった（P.11）				○
4	国道三号線沿いに茂道、袋、湯堂、出月、月ノ浦と来て、水俣病多発地帯が広がり（P.11-12）		○	○	○
5	湯堂の赤土の坂道には秋の影が低くさし（P.14）				○
6	山中九平、十六歳（昭和二十四年七月生）。水俣市湯堂（P.25）				○
7	患者が多数発見され、特に月の浦、湯堂地区に濃厚に発生し（P.34）		○		○
8	場所も月ノ浦方面だから調査してくださらないか（P.41）		○		
9	湯堂部落出の看護婦さんは、あとになって胎児性の子どもを産むことになった（P.43）				○
10	湯堂湾の潮の香にむせていた公民館（P.45）				○
11	特に患者の多発しているのはその中、明神、月の浦、出月、湯堂の四部落である（P.48-49）	○	○	○	○

12	港湾汚染を招来する可能性ありと考えられるものとして（中略）月の浦地区の水俣市営屠畜場、湯堂地区の海中に湧水個所のあること（P.49）		○		○
13	屠畜場は月の浦海岸に面した小丘の頂に存し（中略）湯堂地区の海中湧水は（P.49）		○		○
14	仙助老人（79 歳、水俣市月ノ浦）が死んだ（P.53）		○		
15	熊本大学医学部の検診が、水俣市月ノ浦、出月部落に出張し（P.54）		○	○	
16	彼が、再び月ノ浦部落の人びとの目にあざやかな存在として思い出されたのは（中略）水俣病にかかったからである（P.62）		○		
17	水俣病集中多発地区である、茂道、湯堂、出月、月ノ浦の部落（P.71）		○	○	○
18	仙助老人の死から二十日ほどした二月七日、ぬかるみの出月部落の国道三号線の上で、私はまたひとつの葬列に出遭うのである（P.72）			○	
19	日本国熊本県水俣市出月の、漁夫にして人夫であった水俣病四十人目の死者、荒木辰夫の葬列（P.73）			○	
20	バスに乗り遅れ、出月から二時間かかる水俣市内をつきぬけたはずれの、自分の草屋にむかって（P.75）			○	
21	わたしの村の猫好きの老婆たちは、茂道や月ノ浦あたりじゃ、何べんくれてやっても、猫ん子が育たんげなばい（P.86）		○		

22	網を繕って沖へ出る漁場の、百間港を起点に、明神、恋路島、坊主ガ半島と結ぶ線の内側の水俣湾内は、網を入れると、空網で上がってくるのに、異様に重たく（P.86）	○			
23	月ノ浦方面の猫は、舞うて死ぬ（P.90）		○		
24	患者の住んでいた月ノ浦、出月、湯堂地区の現地調査を開始し（P.91-92）		○	○	○
25	遠い茂道、湯堂、月ノ浦の、猫おどりの話（P.95）		○		○
26	月ノ浦におかしか病気の出とるという（P.104）		○		
27	しかもその水俣のうちでも、とっぱなの局部のですね、月の浦、湯堂、茂道ちゅうても（P.106）		○		○
28	月の浦わの波の音（P.115）		○		
29	坂上ゆき（三十七号患者、水俣市月ノ浦）（P.140）		○		
30	あんたも、月ノ浦のハイカラ病になったかな（P.175）		○		
31	月ノ浦のハイカラ病にかかったかもしれんぞ（P.175）		○		
32	月ノ浦も茂道も湯堂も、部落の夏はひっそりしていた（P.177）		○		○
33	水俣湾の渚は、茂道、湯堂、月ノ浦、百間、明神、梅戸、丸島、大廻り（中略）鳥たちの死骸がおちており（P.177）	○	○		○
34	反対側の明神ガ崎にかけて、漁場の底には網を絡める厚い糊状の沈澱物があった（P.177）	○			

35	米盛久雄（中略）住所熊本県水俣市出月（P.180）			○	
36	月ノ浦の海でも魚ども獲っておらるれば、熊本はよか都じゃった（P.183）		○		
37	月の浦ふきん（P.239）		○		
38	明神の仁助親子（P.239）	○			
39	病原体がいまだ発見できない月の浦の奇病（P.240）		○		
40	最近私が私用で月の浦に行きまして（中略）奇病の話が出まして（P.240）		○		
41	いったん月の浦、出月部落において大火でも発生した場合（P.241）		○	○	
42	月の浦の奇病では大へん皆様に心配をかけております（P.241）		○		
43	奇病はより確実に、月ノ浦、出月、明神、湯堂、茂道と渚ぞいの部落にあらわれつつあった（P.245）	○	○	○	○
44	湯堂において自宅療養患者の状況視察（P.255）				○
45	工場における排水処理状況を視察するとともに明神崎、恋路島（中略）現地の状況を視察したのであります（P.261）	○			
46	水俣川川口の八幡様の舟津部落、丸島魚市場、二子島梅戸港、明神ガ鼻、恋路島、まてがた、月ノ浦、湯堂、茂道。（P.282）	○	○		○
47	朝夕のだれやみ用の肴を採ることを一生の念願として、念願かなって明神ガ鼻の"庭"のヘリに家を建て（P.283）	○			
48	明神にようよう家建てたもんな（P.283）	○			

49	明神ガ鼻はそのときわたくしにはひどく遠い所におもえた（P.284）	○			
50	水俣病患者は最小の村という単位での月ノ浦部落、出月部落、茂道部落などでさえ孤立して（P.324）		○	○	
51	出月在宅重症患者、多賀谷キミさん（48歳）である（P.343）			○	
52	出月部落、茨木妙子、次徳姉弟の家（P.350）			○	
出現回数統計		**11**	**31**	**14**	**21**

＊　下線は筆者によるもので、傍点は原文のままである。